

令和4年度

第10回 座談会

期 日：令和5年2月11日（土）
13：30～16：00

Zoom ミーティングによるオンライン開催

公益財団法人 日本教材文化研究財団

テーマ：「幼児期から小学校期にかけての『保護者との連携』を考える
～架け橋期における保育・教育の質の向上に向けて」

1. 開会のご挨拶
2. 自己紹介
3. 【テーマ1】架け橋期の環境の変化に伴う子育てや学習の不安
発表者 <聖徳大学教育学部児童学科 准教授／深津 さよこ>
4. 【テーマ2】幼稚園では、どのように保護者連携、子育て支援をしているか
－架け橋期に焦点を当てて－
発表者 <共立女子大学家政学部児童学科 教授／田代 幸代>
5. 【テーマ3】小学校では、架け橋期の学びをどのようにつないでいるか、
そして、それをどのように保護者と共有しているか
発表者 <栃木県幼児教育センター センター長／高木 恵美>
6. 全体討論、まとめ

[参考資料] [20230211_jfecr_zadankai10.pdf](#) をご参照ください。

[ご出席者]

コーディネーター 岩立 京子 (東京家政大学 教授 / 財団評議員)
パネラー 高木 恵美 (栃木県幼児教育センター センター長)
田代 幸代 (共立女子大学 教授)
深津 さよこ (聖徳大学 准教授)



第10回座談会

日 時 令和4年2月11日（土）

1. 開会のご挨拶

○三好

公益財団法人日本教材文化研究財団の三好茂徳と申します。本日はお忙しいところ、座談会にご出席を賜りまして誠にありがとうございます。

日本教材文化研究財団では、毎年有識者の先生方をお招きしまして、今後の公益事業の指針づくりに役立てるために座談会を開催させていただいております。今回で第10回目という節目を迎えますが、今回のテーマは「幼児期から小学校期にかけての『保護者の連携』を考える～架け橋期における保育・教育の質の向上に向けて」でございます。

この座談会を企画するに当たりまして、幼児教育や発達心理学を中心に幅広いご専門分野で長年ご活躍され、当財団の評議員でもあられます、東京学芸大学名誉教授で、現在は東京家政大学子ども学部子ども支援学科教授の岩立京子先生にコーディネートをお願い申し上げます。

岩立先生には、平成4年6月より当財団の評議員としてもご参画をいただいております。また、当財団の定期刊行物の研究紀要にもご執筆をいただいたり、家庭教育の分野において当財団と連携をしております「全日本家庭教育研究会」を通じて、ご家庭の保護者に向けた教育記事のご執筆やウェブ配信の動画のご出演などもいただいております。本日はまだコロナ禍が残るという状況で、オンライン開催とさせていただいておりますが、岩立先生には本当にご多用の折に座談会の進行や企画のご検討、またご準備で多大なお力添えをいただきました。この場をお借りしまして、厚く御礼を申し上げます。

そして、パネラーといたしまして、岩立先生よりご紹介をいただきました3名の先生方、栃木県幼児教育センター・センター長の高木恵美先生、そして共立女子大学家政学部児童学科教授の田代幸代先生、また、聖徳大学教育学部児童学科准教授の深津さよこ先生に本日はご登壇をいただいております。皆さま、大変お忙しい中にもかかわらずご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

今回、3名の先生方からそれぞれの専門分野を通じて、またご自身の保護者としてのご経験を通じて、幼児期から小学校へのいわゆる架け橋期における保育や教育の質の向上ということで、非常に重要な保護者との連携について、さまざまなご実践のお話や課題、ま

た今後の方向性などについてお考えをご披露いただけるものと楽しみにしております。

本日はこのような素晴らしい先生方をお迎えしまして、今後の財団活動の指針とさせていただきますと思っております。長時間にわたりまして誠に恐れ入りますが、どうぞよろしく願い申し上げます。

それでは、座長の岩立先生にお返ししたいと思います。岩立先生、どうぞよろしく願います。

2. 自己紹介

○岩立 よろしく願います。

それでは、これから始めたいと思いますが、まず先生方から一言、自己紹介をしていただければと思います。お3人とも幼小の架け橋期の教育に様々な関わりをされている専門家でいらっしゃいます。詳しくはお一人お一人、自己紹介をしていただければと思います。

まず私から、このテーマ設定の理由も含めて、一言、自己紹介をさせていただきます。私は長い間、保育者養成してきておりまして、今38年目ぐらいになります。幼小の架け橋期に関する文科省との関わりとしては、平成22年に、名称が長いのですが「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」という会議に参加したことが始まりです。この会議は、無藤先生と秋田先生が座長、副座長の時で、この当時、もう既に「10の姿」の前身である幼児期の終わりまでに育てほしい子どもの姿として「12の姿」が出されていたんですね。考え方としては、今日の10の姿とほとんど変わっていないと思います。そこをベースに発展してきて、今日の架け橋期のプログラムに繋がっていると思います。今の架け橋期のプログラムというのは、これを全国で共有し、展開していくために、まずは、システムや体制を整えていくという重要なものだと思います。ただ、システムや体制の問題は欠かせないと思いますが、保護者も含めてより具体的に何を伝え合い、共有していくのか、どのようなアプローチを作り出していくのが大事だと思いますので、今回のテーマを挙げさせていただいて、3人の先生からこれまでのご経験やお考えを伺おうと思いました。

私は、保育者として保育をするという実践経験がないのですが、今日は、実践経験の長い先生をお呼びしており、具体的な取り組みの事例等も含めてお話いただけるのではないかと思います。どうぞよろしく願います。

それでは、深津先生から、自己紹介を簡単にさせていただきますでしょうか。

○深津 皆さん、こんにちは。聖徳大学教育学部の深津さよこと申します。

私は、現在は保育の養成校に勤めていますが、大学を卒業後に公立保育園で保育士として14年間ほど勤めておりました。その時に、年長の担任も何度かやらせていただきましたので、その当時は保護者の方の姿とか、小学校に夢を膨らませている子どもの姿なんかを、この座談会をきっかけにすごく鮮明に思い出しました。

今は養成校では、専門は乳児保育ですが、実際子どもが3人おまして、この令和の時代に、そしてコロナの前後で、わが子3人のうち2人が小学校に入学するというような機会がありました。そこでとにかく保護者、私がとても不安だったという部分が、幾つも幾つもあって、この不安をどう解消したらいいか分からなかったし、どこにアクセスしたらいいのかも分からなかったし、保育園の入園とかそういうものに比べると、遥かに霧の中にあるような、よく分からない時期が架け橋期なのかなと思っております。

逆に子どものほうは、さっきも言ったとおり、もう小学校1年生ということで、わくわくして、何も不安はなさそうには見えましたが、むしろ年長の後半の保護者の不安とか、入学直後の不安とか、子どもの姿の変化なんかを見て率直に思ったことを、この後発表させていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

○岩立 それでは、次に、田代先生、お願いいたします。

○田代 共立女子大学の田代幸代でございます。簡単にスライドを作らせていただいておりますので、ちょっと共有しながら自己紹介もさせていただければと思います。失礼いたします。

私は国公立、それから私立の幼稚園で教諭、それから副園長、園長として勤務した経験がございます。この経験を生かして、子どもと保育者が共に育つ実践というのを、今も試行錯誤している毎日です。

私が得意としているところは、先生方の書く保育記録ですとか、遊びの理解、環境の工夫などで、そうしたことを視点としながら、先生方のステップアップを支えていくべく、いろいろな園の園内研修会や、先生方の研修会、また研究活動などに力を入れているところです。

現在は共立女子大学で、一学年150名もいる、本当にたくさん学生のいる大学ですが、そこで将来、保育所、幼稚園、子ども園、小学校で働くことを夢に学修している学生たちを、「生涯学び続ける保育者、学び続ける教師」に育てていきたいなと思って奮闘しているところです。

これが、私が勤めていた東京都の文京区にある湯島幼稚園です。ここを皮切りに、その後、東京学芸大学附属幼稚園に勤務をしました。また、私立ということで、立教女学院短期大学、またその附属幼稚園天使園というところで、すてきなチャペルのある私立の幼稚園でも園長をしていました。現在はこのような形で大学の中に発達相談支援センターなどがある、そういうところで実践的な演習も行いながら授業をしています。私は現場に勤めていた経験から、今日はお話をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

共有を解除いたします。

○岩立 田代先生、ありがとうございました。

それでは高木先生、お願いできますでしょうか。

○高木 皆さん、改めましてこんにちは。

栃木県幼児教育センターのセンター長をしております、高木と申します。この度はお声かけいただきまして、また、多分なご紹介をいただいて大変恐縮です。昨年4月にセンター長として赴任しました。

その前、4年間で公立小学校で副校長3年、校長1年勤務していました。さらにその前の11年間を同じく栃木県幼児教育センターで指導主事をしておりました。さらに遡って、その前17年間で小学校の教員を勤めていました。特に低学年が多かったということと、小学校の生活科が大好きでのめり込んでいたことと、幼児教育で宇都宮大学に内地留学をさせていただき、宇都宮大学附属幼稚園に半年間だけですが、少し関わらせていただいたのをきっかけに幼児教育にはまっていきました。それまでの私は、地球上で一番面白い生き物って1年生だと思っていたんですけど、幼稚園を見せていただく中で、いやいや、5歳児もっと面白いなって。あら、4歳児面白いな。3歳児面白いなってということで、実は今、孫がちょうど2歳。もうすぐ3歳になりますが、本当に2歳児面白いなっていう、そんな日々を送っているところです。

今回、岩立先生からお声かけいただきました。指導主事時代に、今からたぶん13～14年前になりますが、筑波の子育て支援関係の1週間の研修で講師でお話を聞かせていただいたり、あるいは今、乳幼児のママの関わり方というところで、雑誌に連載されているものを、娘と1か月に1回読ませていただいたりして、一方的にお世話になっているので、今日は何か恩返しさせていただけたらなと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○岩立 高木先生、ありがとうございました。

今の自己紹介を伺っただけで、今回のテーマにとっては最適強のメンバーを選ぶこと

ができたとあらためて思いました。これから始まる座談会がすごく楽しみになってきました。

それでは早速、始めたいと思いますけれども、先ほどは、自己紹介を兼ねてテーマ設定の理由を少しお話ししたのですが、幼保小の架け橋プログラムについては、一般の方に馴染みがないかもしれませんので、一言、ご説明したいと思います。文科省の言葉を借りてご説明しますと、子どもに関わる大人が立場を超えて連携し、架け橋期、これは義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生を言いますが、その2年間にふさわしい、主体的、対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で、全ての子どもに学びや生活の基盤を育むことを目指すものということです。これは考え方としては、先ほど申し上げたように、平成22年以降、その重要性が広く認識されてきたものだと思いますが、それを全国的により確かな実践につなげるということで推進されているものです。これは日本だけではなくて、欧米においても、今この架け橋期、非常に重視されておりますので、幼児教育行政においても非常に力を入れていく施策なのではないかと思っています。

行政が枠組みを策定し、それがスタートにはなると思うんですけども、そこから、実践の場で、具体的に計画や実践を作っていく時で、今、委託研究等で様々な研究が行われ、実践が試行されていると思います。そこでは、保育・幼児教育の質を高めるために教育課程の接続や、発達や学びの連続性が強調されていますが、子育て支援というか、保護者との連携は、それほど、強調されていないようにも感じます。それをしっかりと位置づけて考えるという示唆は、育ち合う幼児教育・保育という観点からもすごく貴重だと思います。そのようなことで、先生方には、架け橋期において、保育の質を高めるためにも、育ち合う共同体を作るためにも、保護者との連携の重要性や、こんなことを是非、提案したい、共有したいということがあれば、それらを強調していただきながらご発表いただきたいと思っています。よろしく願いいたします。

それでは、深津先生からお願いします。深津先生は幼児教育の専門家でもあるんですが、今日は保護者の立場を強調しながらご発表いただきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

3. 【テーマ1】架け橋期の環境の変化に伴う子育てや学習についての親の不安

発表者<深津さよこ先生>

○深津 よろしく願いいたします。

では、画面の共有をさせていただきたいと思います。

保護者の立場からということで、架け橋期の環境の変化に伴う子育てや学習の不安について、経験談を交えて発表させていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

まず、先ほど岩立先生がおっしゃっていた幼児教育架け橋期プログラム、文科省のものですが、そこに課題として幾つものことが載っておりました。その中でこの2つについて着目をしました。

1つは学校種・施設類型を超えての連携・協働。これが課題であると提示されているのですが、その具体的内容を見てみると、学校と幼児教育施設の連携・協働が小学校の行事を体験するというような交流行事などに限定されているという部分ですとか、小学校の先生方の幼児教育への理解がまだなかなか進まないという部分が挙げられておりました。

そして、2つ目の子どもの個々や家庭環境に応じた対応ということで、この時代は外国籍ですとか虐待とか、さまざまな特別の配慮が必要な子どもが数字として多くなっているという部分と、子どもが背負っている家庭環境、成育歴、乳幼児期の経験から生まれる部分に着目をしていくというところが格差につながっているようなことが書かれておりました。この2つに着目した点としましては、私のこの子育ての経験を踏まえて、特に1番は小学校と幼児教育施設、私はフルタイムで働いておりますので、保育所を利用しておりますが、ここが保育所と小学校の連携というものが、本当にまさに交流行事のみだったなっという部分と、お互い、小学校ってこういうとこだよとか、保育園から来るなら、こういう準備が必要だという助言が、なかなか得られずに頼りにしたのはもうママ友だけだったというような感じでした。

そして2番の、子どもの個々や家庭環境のという部分は、例えば、学習に影響するような病気があった場合どうしてくれるんだろうとか、そもそも学校の時間割り、1年生の初期の時間割りってどういう感じで進むんだろう、子どもは一体何時に帰ってくるんだろう、私は何時間目まで大学で授業ができるんだろうというところで、自分の働くイメージというものが具体的に見通せなかった部分で、ものすごく働きにくさを感じた部分がありました。

保育園児ですので、小学校の後に学童クラブに行くのですが、いろいろなところで言われているように、保育園よりは学童クラブのほうが終了時間は早いもので、1時間以上早く閉まってしまうので、もう大学で3限までしか授業ができないとか、そういう部分で、いろいろ大学との調整とか、祖父母の協力をどうするかとか、家庭をどう回すかという

ころまで、小学校に入る部分ではすごく苦勞しました。

そこで、何をここで話そうかと思った時に、取りあえず困ったこととか、学校に入学してびっくりしたことなんかをざっくばらんに自分でばーって思い出して書いてみたのですが、とにかく思い出すわ思い出すわという感じで、たくさん出てきました。もうこれ、全部ネガティブな部分だけですね。

もちろん、同じ数、それ以上にポジティブな部分もあったと思うのですが、自分が困ったこととか不安だった部分というのは、こんなにあったんだというのを改めて活字にして気付いた、改めて認識したというところがありました。

これをちょっと整理して話したほうがいいだろうと思って、いろいろと先行研究なんかを調べてみたのですが、割と先ほど岩立先生がおっしゃったように、教育プログラムとかカリキュラムに関連したものが今主流のような感じで、保護者を中心にした部分というのは、なかなか見つけられず、ちょっとすごく勝手に自分で分類を考えてみました。大きく分けて2つの部分が不安とか負担と感じていました。これ、就学前なのですが、一番は私自身、保護者として不安とか負担だと感じた部分、4月以降の生活スタイルがうまくイメージできないですとか、4月はこうで、5月はこうで、夏休みはどうなっているんだろうみたいな、見通しの部分がよく分からなかったというところ。

そして、子ども自身ですね。わが子に関する不安という部分ももちろん大きくありました。小学校にうまく適応できるかなという部分もありますし、学習も含めてですね。それから、幼児教育施設と大きく違うのは、やっぱり1人で登下校をするという部分でしたので、安全面に関してはどうやって保証していけばいいのかは、とても心配しておりました。

これを表にしてみたのですが、学習面に関しては、私自身は学校に行けば時間割りどおりに先生方が教えてくださって帰ってくるだろうと。ところが、この後に「宿題があるよ」とママ友に教えていただいて、そこには「そばに親がいないと進められないよ」と聞きました。例えば、教科書の音読を全部聞いてサインをするとか、漢字の書き取りを見てコメントを出すみたいな、必ずそこで横で見守っていなければいけないという家庭学習について、私はその時間、できるかなという部分が不安だったんですね。

それから、小学校に入るまでの持ち物の準備も、何だかよく分からなかったのがあります。もちろん小学校からこういうものを準備してくださいと分かりやすい冊子があったりとか、1年生の説明会の時に見本を見せてくださったりはしたんですが、それがいつ頃必要で、本当にもう昭和みたいな感覚ですが、みんな手縫いで作るのかなとか、そういう部

分でよく分からなかったところがありました。

学習についての子どもに関するものは、年長さんの時も遊びが主体ですので45分間座ってどうのこうのというのは、なかなか経験しておらず、保護者もそういうことを求めていなかったのですが、卒園する3月31日までは、いわゆる年長さんらしく過ごしていたんですが、小学校に入った後に、これが最初から45分座ってなければいけないのかなとか、最初は自由で、そのうちだんだんと変化していくのかなみたいな部分分が分からず、学習がどうやって進んでいくのかもイメージができていませんでした。そして、子どもが環境に適應するのかという部分とか、持っていった物の管理を、うちの子ができるのかな、失くさないのかなという部分が心配でした。

次の人間関係の部分ですが、新しい環境になりますので、それぞれ出会う先生方、お友達等との関係を築く上ではやはりここは心配な部分でもありました。

生活面のところですが、1人で毎日登校する。こんな単純なことですが、よく考えると、保育所は毎日登園しなくても、今日はちょっと休もうとか、今週は旅行に行くからいいかみたいな感じで、家庭中心にスケジュールを決めていたもので、毎日毎日登校するというスタイルが自分も小学生時代には経験しているのですが、大きく変わった部分ではあるなと想起して思っています。

そして下校時間の変化ですが、入ってみて分かったのですが、最初はずっと1カ月ぐらい4時間授業が続いて、給食なしの時間があって、その後時々午後の授業、5時間目が入ってきて、だんだん延びていくという感じだったんですね。これが最初に分かっていたいなかったので、一体いつまで給食が出るのかな、出ないのかなとか、何時に学童にこの子行くんだらうみたいな感じで、1日の子どもの行動スタイルがよくイメージできなかった部分がありました。そして、もちろん学童クラブにも同じく入るのですが、子どもが朝、小学校に行く、そこが新しい環境の1つ目であり、2つ目の新しい環境の学童というのが、同時に波のように来るわけですね。ここの新しいそれぞれの先生たちとメンバーの違いに、子どもが慣れるのかという部分と、自分もそれぞれのPTAとか保護者会とか、先生方との関係性とか、全部全部を頑張っていくという部分がなかなか難しかったです。

そして、学校のスケジュールが分からないので、習い事なんかのマネジメントもすごく苦労しました。子どもがどれぐらい疲れて帰ってくるのかとか、何時に学童に迎えに行ったら、この曜日はこの習い事ができるのかなとか、そういう部分がなかなかイメージしづらかったんですね。

そして、最大の山場である夏休みですが、この辺りもたまたま私は大学の教員で、夏休みというものが、割と自由な時間を設定できますが、他のお母さんたちはそうではなくて、事務職だったりお店に出ているので、この夏休みに入った途端に、また学童に違う時間帯で登校して、お弁当を持って行って帰ってくるような、また生活スタイルが大きく変わるといふ部分が不安だったと思います。

そして、保護者会とかPTAの時間設定で保育所といつも比較してもあれなのですが、保育所はやはり子育て支援をメインにしておりますので、こういう部分が夕方の4時とか、土曜日とか、そういう時間帯に設定してくださって、仕事の調整がとてもしやすかったのですが、小学校に入った途端に、お昼の2時に来てくださいますとか、PTAなんかも平日の午前中の設定か、いまだかつて全てですね。そういう設定を、先生方のスケジュールもあるから仕方ないのですが、何だか働いている保護者はちょっとハードルが高いなという部分を率直に感じておりました。だんだん足が遠のいてしまったり、もう最初から一回も「無理、無理」って言って行かないような保護者の方もいらっしゃいましたので、保育所の時代に比べると、参加率という部分では随分低くなっているんじゃないかなと客観的に見て感じています。

そして生活面ですが、子どもが小学校へ行って、学童に行って、私が学童に迎えに行かなければ暗い中1人で帰ってきて、宿題をしてという流れが、子どもに1人でできるかなという部分と、あとは生活スタイルですが、小学校に行くと、もう本当に疲れて帰ってくるらしいということで、早寝、早起きという部分が実践できるかなという部分も不安でした。

そして最後に危機管理の部分ですが、私が暮らしているのが都心なもので、随分車の量とか、それから不審者対策というものが、すごく皆さんセンシティブになっている部分ではあります。子どもたちの持ち物に、外に見えるように名前は書かないとか、体育着のゼッケンなんかもないですし、必ずもう携帯とかスマホとか持っていない子のほうが珍しい。GPSが付いているのでね。そういう部分では、子どもが今どこにいるのかを、割とリアルタイムで管理というところとあれですが、知っておかないと何かの時に駆けつけられないというような恐怖心もありました。

子ども自身は、いわゆる鍵っ子になりますので、家の鍵を渡すのですが、こういうものが自分で管理できるかなとか、家に帰ったらちゃんと鍵を閉められるのかなという部分が、どんなに練習をしてもやっぱり不安であったのは確かです。

表の外の部分ですが、幼児教育施設、保育所が解決してくれた具体的事例は、実はこの中にはなくて、黄色のラインを引いたのは、小学校が1年生の説明会の時に、私の不安を解決してくれた部分ではあるんですね。これはこうですよ、あれはこうですよって説明してくださって、ここの辺は何となく分かったなって思ったのが黄色のラインの部分です。

保育所は、具体的な見通しとか生活スタイルの変化なんかは、あんまり助言はしてくれなかったという大変ですが、というよりは、「保護者会で先輩ママに話を聞いてみましょう」とか、「うちもそうだったのよ」みたいな感じで、ものすごく精神的に励ましてくださったりとか、「何かあったら小学校入学しても戻って相談しに来てね」なんていう様な声をかけてくれたのが大変ありがたかったなと思っております。

そして、これが就学後、入学してすぐですね。およそ1学期の半ばぐらいまでなのですが、先ほどの同じ表で解決されたなと思った部分には二重線を引いてみました。本当に1か月とか、1か月半ぐらいで、ほとんどの悩みが解決されるんですね。いろいろ不安に思っているが、いざやってみたら、ああ、こういう感じだったのねって分かる部分が大変多かったんで、思っていたよりはハードルは低かったんだなと思うんですが、まだまだちょっと分からない部分とか、1学期の半ばからまた新たに増えてくる不安、負担が変わってくる部分であったと思います。

生活の部分で、この赤字の部分がちょっと増えた部分ですが、やっぱり保護者会とかPTAの時間の設定は、相変わらずつらい部分ではありました。そして担任の先生と接触する機会の減少とあるんですが、何か相談したい時に、どう連絡を取っていいのかわからなくて、すごく悩みました。学校に電話をしてみると、主事さんか何か、職員室の先生方が出て、「〇〇先生いますか」と言っていると、その先生をすごく探し回っているような、なんかもう申し訳ありませんっていうような、お忙しさを感じますし、連絡帳に書くと子どもが読んで「ママ、こんなこと書かないでよ」というような感じで、相談したいことができなかった。唯一なのは個人面談の時ですかね。年に1回の。この時にちょっと相談することができたかなということで、保育所のように日常的に朝とかお迎えの時に相談できるようなそういう感じではなくて、時間をちゃんと取って、面と向かって整理してというような感じの相談の機会だったかなと思っています。

危機管理に関しては、子どもが自分で遊ぶようになった時に、友達と遊ぶ、〇〇ちゃんと公園で何時に遊ぶ時に、お互いの親が知っていないと駄目とか、それぞれ家庭のルールの擦り合わせがなかなか難しく、この辺はいまだに苦労している部分ではあります。や

っぱり難しいですね。家庭の価値観が違くと、つながるのもなかなか難しいかなという部分があります。

入ってみたら、こんなに解決されたんだとは思いますが、こんなにすぐ解決されるんだっただけ、就学前に把握しておきたかったなっていう部分が大きくありました。大きく幼児教育施設は、今思うと、家庭中心で子ども中心で寄り添ってくださったんだという様に感じましたが、小学校は小学校中心というか、小学校のスタイルに私たちが寄り添って、一緒に子どもたちを育てていく、学習面を伸ばしていくというような印象です。

最初のスライドと同じものですが、一番の学校種・施設類型を超えての連携・協働という部分では、これだけ共働きのご家庭が増えてきた時代に、幼児教育施設と小学校だけの連携・協働ではなくて、ぜひ放課後児童健全育成事業、学童クラブを、ここも自治体が違うんですが、一体的に包括的に支援をしてくださると、3つの場所で一緒に家庭を応援してくれると本当に助かるなという部分がありました。小学校に入学して、すぐに、「あ、頼れるな」と思ったのは、実は小学校ではなくて学童クラブでした。

そして2番の子ども個々や家庭環境に応じた対応で、こんなにすぐ悩みが解消されるのかという部分がありましたが、大体時系列に沿って恐らく悩みがどんどん変わっていくんだろうなという予想が立ちます。保護者が展望を持てるような支援をしてほしいなという部分。時期によって、不安とか負担の内容が変化するということが分かりました。

そして先行研究でも、滝口先生のもので、1学期終了後に4割の保護者がもう慣れたと感じると。そして後輩のママたちにどんな助言をするかということもありまして、すごく興味深いことに「大丈夫、大丈夫、入れば慣れるから」みたいな感じの助言だったんですね。本当に思っているよりハードルは低いんですが、すごく高く感じてしまうっていう部分が問題点かなというふうに思っています。そして、学童クラブの点でもそうですが、就労している保護者への配慮？共存？とちょっと言葉が選び切れなかったんですが、働いていると、どうしてもなかなか学校の指定された時間に足を向けることが困難なのですが、この部分を何とかどうにかできないかなと思いました。

最後に、これ引用文献なんですけど、最後に私、第一子がいわゆる普通に小学校に入学したんですが、第二子が完全にコロナ期で、入学式も行えないような状況の時に1年生になりました。つまり最初の、どれぐらいだったかな。一回も学校で授業をする前に、ずっとオンライン授業だったんですね。ですので、先生にも会ったことがないし、お友達も知らないけど、画面で授業をしていて、私が第二子だったということもあるんですが、子ども

が学んでいる姿を見るっていう部分で、すごく安心したのを覚えています。あ、こんなふうに先生、授業するんだとか、お友達ってこんな感じなんだとか、1時間目はこんなふうに45分って組み立てるんだなっていうのを、私も隣でオンライン授業しながら眺めていました。そんなふうに実際学校の中を保護者が見るといふか、体感できるような機会が多ければ、随分不安が軽減されるのかなと思った次第です。

これで私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○岩立 深津先生、ありがとうございました。

本当にたくさんの悩みがあるんだらうなって、自分の子育て時代を思い出しながら聞いておりました。高木先生、何かお感じになったことなどがありますか。

○高木 私も1年生の担任が多かったので、深津先生のような、一生懸命なお母様をたくさん見てきました。私が1年生の担任をしていた時に、一番心がけていたのは、子どもって意外と順応力が高いんですね。保護者の方が心配するほど、子どもは困ってなくて、おうちの方の心配度が、そのまま子どもに出ちゃうということがすごくあって、なので私は必ず入学式の時に、とにかく「ママやパパが、朝ご飯をしっかりと食べさせてくれて、それで『はい、いってらっしゃい』って学校に元気に来させてくれれば、それだけでいいですよ。あとは全部学校でやるので、それだけお願いします」とお話しました。

あとは、「いつでもお電話ください」といふことも言うておきました。ただ、システムとして、もちろん授業中は出られないですし、放課後も会議などが入ってれば出られないですけど、「必ずこちらから連絡しますから」とお話をして、おうちの方、特にお母さんをまず安心させてあげることが、子どもたちが安心して学校に来られる、私の中ではそれが第一条件だったかなと思っています。

○岩立 ありがとうございます。いつでも連絡可能というところが、すごい安心材料ですね。

田代先生、何かお感じになったことがありますか。

○田代 深津先生の話をお伺いして、親自身が学校とどう関わるのかとか、親自身が子どもの入学準備をどうするのかとか、親自身が関わることについての悩みが多いということをお聞きして、すごく感じました。

また、高木先生が、そんなふうに保護者に声をかけてくださっているというの、幼稚園や保育所と変わらないと思いました。私も自分が幼稚園で担任していた時代は、例えばクラスに25人子どもたちが入ってくるとすると、25人の子どもプラスお父さまもいら

っしゃるのですが、25人のお母さま、合わせて50人を自分が担任として関わっていくと思っていないと、なかなかうまくいかないところがあって、たぶん1年生も、その延長で、高木先生がお話くださったように、保護者へも視線を向けて、声をかけていくことが、その時期の不安を随分解消してくれるのだと感じました。子どもたちが実際小学校でどう学んでいくのかというよりも、親がどう関わるのかという悩みのほうが大きいのかなと思いついていました。オンラインでどんなふうに授業しているのかという話が最後にやっと出てきたので、なんかすごくそういうところが聞いていて面白いなと思いました。

○岩立 私も田代先生と同じようなことを少し感じました。私の場合は、子どもはちゃんと勉強に付いていけるのか、どのように勉強しているのかなど、気になることがたくさんありました。私の長男は、3月の末生まれの、いわゆる発達のパースの遅い子で、例えば塗り絵も至る所ではみ出しても平気な子、気づかないタイプの子なんですね。ですから、幼く、本当に勉強に付いていけるのかというのがありました。深津先生のところはそういう心配はない、しっかりしたお子さんなんだろうなと思いついて、聞いておりました。

でも、学びについて理解できてよかったと話されたので、やっぱり、そういったところも多少は、気にされていたんだなと思いついてました。本当にありがとうございました。

それでは時間の関係から、次に、田代先生のご発表をお願いできますでしょうか。

4. 【テーマ2】幼稚園では、どのように保護者連携、子育て支援をしているか —架け橋期に焦点を当てて— 発表者<田代幸代先生>

○田代 では画面を共有いたします。

改めまして田代です。私が頂いているテーマは、幼稚園ではどのように保護者連携、子育て支援をしているのか、架け橋期に焦点を当ててということです。この幼稚園という場所は、本当に子どもにとって「初めての社会」になるということで大事な場所だと思います。それから、私は園というのは、子どもだけが育つ場所ではなくて、子どもも保護者も、そして保育者も3者が共に育っていく場所と思いついているので、保護者の連携とか子育て支援といつても、やっぱりそこで子どもがどう育っていくのかということを真ん中に置いて話をしていくことが、本当に重要だと思いついています。

また、園は子どもたちが確実に成長していく姿を保護者に見せること。いい保育をして、こんなふうに育ってきたというところを見せたい。子どもが「幼稚園に行くのが楽しい」

「先生が好き」「お友達が好き」、そういう状況を私たちはつくること、それが保護者との連携、子育て支援であり、一番の子育て支援になっていくと考えています。

また、架け橋期に焦点が当たっているのですが、最初に岩立先生からお話があったように、架け橋期は5歳児から1年生というところで設定されています。5歳児、就学前後ということで5歳児が重要ということには異論はないのですが、5歳児の育ちというのは、そこで急に育つわけではなくて、やはり幼稚園であれば、3歳児、4歳児の積み重ねの上に、この5歳児の育ちがありますし、また3歳児、4歳児のところで、子どもたちがどんなふうに学んできているのかを、保護者にも理解していただかないと、この5歳児の協同的な姿は育っていかないので、今日は、この保護者と子どもをつないでいくためには、幼児期の教育が充実するところを大事にしてお話ししていきたいなと思います。

お話ししたいことは2つありまして、遊びを通した学びが、小学校以降の生活や学習の基盤になっていること、もう1つは幼児期の教育って、本当に保護者との連携が欠かせなくて、それが基盤になっているところをお話できたらなと思います。

まず、遊びが基盤になっているというところからお話します。3歳児の入園したての頃の写真をスライドに入れてきました。まず新しい環境の中で子どもたちには、自分の好きなものを見つけてほしいなって思いながら保育をしているのですが、このお子さんはじょうごという道具と出会って、それが面白いと思ってずっと使い続けている、そういう姿でした。大人が考えるじょうごという道具は、ペットボトルなどに水を移す時に使う道具ですよね。なので、大人がこれを使う時には、もう、すぐにそういう使い方をするのですが、子どもたちってこういうものと出会っていく時に、本当にそのものの特徴とか形とか特性とかっていうのを、自分のやり方で、いろいろなやり方で知って知っているんです。右の写真見ていただくと、穴がたくさん開いているのがお分かりいただけると思うんですが、じょうごを砂場にぎゅーって押し付けてみたら、三角錐の穴が開いたんです。この子どもは言葉では言いませんが、それがとても面白かったんだと思うんです。なので、何回も何回も何回も何回も、ここの写真に載っている3倍ぐらい砂場に穴を開けて、ずっと穴を空けては、その穴を見て、自分が操作して、三角錐の穴が開くっていうところで、この道具の面白さを感じていました。

それがだんだん変わってくんですが、そのうちぎゅっと押し付けると、左上の写真のように圧力で中から砂がむにゅっと上に上がってくるんです。これを発見した後、今度このお子さんは、ずっとそれを注目して、穴を開けながら、じょうごの中に砂がどんどんたま

っていくのを注目して見ていたわけです。最後は砂がいっぱいたまると、誰かにそれを見てほしくて周りを見回すわけです。写真を撮っていた私と目が合って、じょうごの中にいっぱい砂がたまったことを、うなずいて、「すごい大発見だったね」というような眼差しを送ると、本人も満足して、またその砂を捨てて、また続きをやっていくという姿でした。

私はこういうところに、子どもがものと出会っていく、すごく大事な学びがあるなと思っています。他にも、右の写真はそこに置いてある遊具を、もうとにかくたくさん並べて、いろいろなものをたくさん使いたいというお子さんもいますし、左上の写真はスコップを2つ怪獣の口のようにして、そのスコップを片手で動かしながら、ばくって砂を取って、何かが砂を食べてるようなイメージで道具を動かし続ける、そういうことに注目して遊んでるお子さんもいますし、左下のように、これはたぶん大人が一般的にイメージしやすい遊びの姿だと思うんですが、型抜きをしたり、こんな感じで子どもたちはものと出会っていつているなと思っています。

新しい環境に慣れるって、本当に大変なことで、さっきの深津先生の小学校1年生に上がるところは、親も子も新しい環境だと思うんですが、幼稚園や保育所に入園することも、新しい環境ですし、学年が1つずつ上がっていく、保育室が変わる、先生が変わる、それも新しい環境だと思うんです。そういう中で、どうやって安定してくのかというと、やっぱり好きなものが見つかるとか、好きな場所が見つかるとか、好きな人ができるとか、そういうところから、子どもって安心して動き出すんじゃないかな。そこでやっぱり一番基本になっているのが、教師との信頼関係です。そこで安心して、安定して心と体が動き出すと、子どもってどんどん主体的に動き出して、そして身近な環境と関わっていく。こういう学び方があるんだということを、保護者と共有したいなと思います。

そして一人一人のやり方で、こうした環境と関わってく時に、そのものの持つ意味とか、特徴とか、そういうものに気づいて、子どもってそれを取り込んで遊んでいくので、そこで試行錯誤したり、たくさん考えたりするようになっていきます。

もう少したって、3歳児の後半ぐらいになってくると、1つの遊びの場が面白くなってくると、その場に子ども同士が集って、友達と関わるようになっていきます。

これはある日の保育記録なのですが、写真のようなコースを設定しておいたら、子どもたちがそこでいろいろなものを転がして楽しみだしたという記録が書かれています。そこで教師は、子どもが経験していることを捉えているわけです。いろいろなものを転がすこ

とを面白がる。これを子どもとやっ払いこうと思うわけです。

なので、次の日の保育の環境も、転がせるものを幾つか用意したいなとか、コースを転がしたいわけなので、壊れてしまうと遊びが終わってしまうので、壊れないコースを1つ用意するところも、すごく大事かなって思います。子どもたちが自分でもコースが作れるように、桶も準備するっていうような、こうした配慮をして保育をしています。

左上の写真は、子どもたちがどんどん桶を並べているところなんですが、接続する面を見ていただくと、上からものが転がってくるんですが、桶の重なり方をみると、たぶんここでぶつかってものは止まってしまうんです。でも転がすことを面白がっているんで、やっぱり転がってほしい。先生は右上の写真のようにさりげなく桶の重なりを上下を変えています。そして、子どもたちはそこで転がして遊ぶんですが、右下の写真のように、柿を転がしてみたり、カリンを転がしてみたり、左上の写真ではドングリを転がしてみたり、ドングリが入っていたかごを転がしてみたり、本当にいろんなことをやります。

かごは転がしてほしくないなっていう気持ちが大人の中にはあったり、前の子が転がし終わってから、次のものを転がしたらいいのになって思ったりもありますが、子どもたちは割とそういうことにはお構いなく、自分のペースで次々転がして、それでなんか遊びが成り立っているっていうようなところがあります。これ、右側に女の子が1人立っているのですが、この場で遊んではいませんが、この場で遊んでいる子どもの様子を見に来て、じっと見ている。そんなお子さんもいます。

1つ面白そうな場ができることで、そこに子どもたちが集まってくる。そこでいろいろな子が、いろいろなものを転がしていく。もちろん桶が崩れたり壊れたりして、また直したり。先生が、重なりを自然な形で転がるように直したり、いろいろなことをしながらここで遊んでいるわけですが、ここで「いろいろなもの転がして楽しかった」という共通の体験をすることが、子どもと子どもを親しくさせていきます。「一緒にやったよね」とか、「あの時一緒にやって楽しかったよね」というところから、人間関係がつながっていくのだと思います。

最初にお話しした、ものと出会っていくことや、今お話ししている、こうした人と出会っていくこと、これがしっかりと積み重なっていくと、5歳児になって周囲の環境、ものや人と十分に関わりながら、協同的に、そしていろいろ考えて試行錯誤して遊んでいくという姿が育っていきます。

これは、いろいろなものが転がせるように担任の先生が事前に用意していた環境です。

11月ですから、秋の季節感、秋の園庭にある自然に気づかせたいという思いもありますよね。ドングリがあったり、松ぼっくりがあったり、カリンがあったり、柿があったり、ゆずがあったり、これらは園の中に落ちているものなのですが、みんなが拾ってきたり、何だろうこれって言ったものを、こんなふうに並べて集めて置いてあることで、自然と関わったり、遊びに使ったりする姿が生まれてきます。

実はこの転がす遊びのところで、一番面白く転がったのはゆずでした。形がまんまるなのと、ちょっと重みがあるので、長いコースを作っても、最後まで転がってってくれます。ゆずを転がすのが面白かったのですが、カリンはいびつな形をして、そしてとても重いです。ごろん、ごろんと転がっていく。その転がり方も面白くて、何度もそれを試す子もいましたし、ドングリも細長いドングリや丸いドングリや、いろいろな種類のドングリがありますので、転がり方がみんな違う。そこでみんな転がすことを面白がりながら、いろいろなものに気づき、そこにいる人と出会っていくというような、こういう遊びがとっても大事なんじゃないかなと思っています。

面白そうなことを繰り返すという時に、やっぱり面白いから何度も子どもはやるんです。何度もやるうちに、自分でもやってみようってなったり、あの子がやっているものを自分も転がしてみようってなったり。あとは、自分なりにコースを作ってみたり、動いてみたりということがどんどん繰り返されていきます。そこで同じ場にいる他児と関わって、他児と関われば、いろいろな気持ちに気づいていきます。自分が使っているものと違うものを使っていると、どこにあったのかなと思ったり、思ったとおりに転がっていかないと、あれって思ったり。止まってしまうと変だなと思ったり、自分が転がしたいのに、前の子が転がしたカリンがいつまでもそこにあると困るわけですよね。転がしたいのに、早くどかしてほしいなって思ったり、自分がやろうと思ったのに違う子がやっちゃって、嫌だなと思ったり、いろいろな気持ちをここで味わいながら、他児の存在ということに気づいていく、大事な学びのひとコマになっていると思います。

そして最後の事例は、5歳児のまさに架け橋期、児童期へとつながっていく時期の11月なのですが、友達と遊びを進めながら考えたり、工夫したりするという遊び方をしています。

今、写真中央にたくさん洗濯ばさみがとまっているところは、すのこが2枚くっついていところなんです。すのこと、すのこの間をビー玉が転がって、面白いというところから、このコース作りが始まりました。

積み木を使ったり、それからいろいろな空き箱を使って、ビー玉が積み木の階段の上からスタートして落ちると、すのこのレールを通して、その後はちょっと距離のあるところへ落ちて、ぐるーっと斜めに回ってくるわけです。これが落ちるところが、うーんと低かったりすると、ビー玉が落ちたところで跳ねて外に行ってしまうとか、それから転がってくる時に半周回って転がっていきたいのに、勢いがあり過ぎると、ちょうどカーブのところではビー玉が飛び出ていってしまって、コース通りにいかないわけです。そうすると子どもたちは、そこに飛び出ないように高く紙を貼ろうとしたり、スタートのレールから落ちるところが跳ねてしまうと、後から箱をたくさん足して、もうちょっと落ちる距離を短くしてその衝撃を和らげようとしたり、いろいろなことを試しながら、どんどんコースを作って遊んでいました。

もちろんこれだけいろいろなものを使って、友達と一緒に作っているわけですから、一緒にやろうという目的を共有していたりとか、身近にあるいろいろな形やものの特性も分かっていないと遊べないですし、ガムテープを使うとか、はさみを使うとか、セロテープを使うとか、いろいろな道具も使うわけです。そして1日だけでは出来上がらなくて、今日も明日も続きをする、また続きをしたい、そんな形で何日も遊びが続いていくというような場面でした。

この場面で友達と遊びを進めながら考えたり工夫したりしている、この遊びを少し分析的に見ていくと、いろいろな窓口から子どもが経験していることを読み取ることができると思います。幼児教育ですから、5領域がありまして、例えば領域の言葉の窓口から、この姿を読み取ってみると、子どもたちの自分の思いや考えを、言葉を伝えていました。「ここに箱を置いてみようよ」とか、「ここは何で飛び出ちゃうんだろう」って話しながらやっているわけです。そんな時に、友達の思いや考えを聞きながら遊びを進めています。

また、人間関係という窓口から経験を読み取ってみると、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わっていたり、このビー玉転がしのコースを最後まで完成させるということを目的にして、工夫したり協力したりしています。また、転がして遊ぶ時に、「さっき僕がやったから、次は君ね」というような形で順番を考えたり守ったりして遊んだりもしています。

環境の窓口から見ると、ビー玉を転がすコースの仕組みをいろいろ考えて、工夫して作っていたり、身の回りにある道具や空き箱の形などを生かして、遊びに取り入れることもしていて、すごく一つの遊びの中で子どもは多様な体験、経験をしていることが読み取れるのがお分かりいただけるかなと思います。これらが小学校にもつながっていく、3つの

資質能力の育ちでもあります。言葉で伝えるとか、話を聞くところは、大事な知識や技能の基礎につながっていますし、ビー玉が転がる仕組みをあれこれ考えて、そこを作っていくのは、思考力や判断力、表現力等の基礎でありますし、また友達とどうしたら工夫して協力して、楽しく遊べるのかは、学びに向かう力や人間性になります。

このように友達と遊びの目的を共有していくこと。そこで身近な物の特性を活用するか、友達と協同して遊ぶとか、困難なことや難しいこと、いざこざがあっても乗り越えていく、そういった姿が小学校に就学していった時の学びの基礎力として、本当に大事な支えてくれるものにつながっていくのではないかと考えます。

環境との関わり方や意味を取り込んで、試行錯誤したり考えたりしながら、友達と共通の目的に向けて粘り強く取り組むという体験を、遊びを通してしっかりと培っていくことが小学校以降の学習や生活の基盤になっていくものと考えています。

今の事例の中で、子どもたちはいろいろな規則性に気づいたり、全体の中の今この部分をつくっているっていう、その全体の一部を考えたり、前よりも箱が高くなると、落ちる時の落ち方が変わるとか、紙が上まで来ると、飛び出していたのが飛び出なくなるみたいな比較とか、因果関係とか、こうしたらこうなるのではないかという仮説を立てながら確認をしたり、そして粘り強く取り組むという、いろいろな力を身に付けていたと思うんですが、これらは今スライドに出しているような研究がありまして、そういった中で、特に左側の論理的な思考力というのは、高校生の論理的な思考力の調査研究をした翌年に、この幼児期の論理的な思考力の調査というのが行われまして、高校生と同じ、ほとんど同じ6つの視点につながるような、こういった6個の項目が遊びの中で捉えられることを示した研究になっています。右側のほうの研究は子どもたちの学びに向かう力というのが、遊びの中でこんなふうに育まれていっているのをたくさん抽出した研究になっています。

続いて2番目に、幼児期の教育は保護者との連携が基盤となることということについてですが、まず、家庭や地域では愛情としつけを通して、心の基盤を形成していただきたいですし、おじいちゃん、おばあちゃんも含めて、地域のいろいろな人との交流が豊かな体験となる。そういうような場を、家庭や地域で持ってほしいと思っています。そういったことと、園での、今お話ししてきたようなことが連携していくことで、質の高い幼児教育が実践され、遊びを通した学びを保護者と共有していくことができるのではないかと考えています。

保護者の悩みは、すごく多岐にわたっていますが、園の中では、例えば親子関係、どう

子どもに関わったらいいかという悩みの相談ですね。なかなか支度をしないとか、片付けをしないとか、ご飯を食べてくれないとか、好き嫌が多いとか、そういう家での関わり方だったり、家族間の人間関係のことだったり、愛情あふれるあまりに過保護や過干渉になってしまうことだったり、あとはしつけや教育をめぐる多様な価値観なども保護者の悩みとなっていました。

園の中では家庭で見せる姿とは異なる姿が出てくることがあり、そういったところで何かその子の特性が発見されていくようなケースもありました。また、集団生活をしていきますので、いろいろなお子さんがいて、他児との比較などで悩む保護者がいたり、子どもたちの興味や関心、人間関係の広がり方や深まり方はいろいろなタイプがあるので、なかなかものの興味や関心から人に向いていかない場合に、友達関係を悩む保護者がいたり、いつも仲良しの人というけど広がっていかなくていいのかなという悩みがありました。あとは深津先生のお話につながりますが、小学校に向けて、うちの子は大丈夫かなという不安があったりというところで、こうしたことに対応してきたかなと思います。

用意したお話は以上です。ありがとうございました。

○岩立 田代先生、ありがとうございました。

私は附属幼稚園で4年間園長をさせていただきまして、そのうちの2年は田代先生が副園長の時にさせていただいたんですね。その時に、先生方が子ども一人一人に眼差しを向けて、とても丁寧に保育をつくっていく。だけどそのプロセスや、それを通して育っていく子どもの姿をすごく面白がっている。それがエネルギーとなって、研究へと向かっていく。そういう先生方の姿を思い出しながら、今聞いておりました。

深津先生、何かお感じになることありますか。

○深津 私も、田代先生が見せてくださった写真を見ながら、そうだ、私、幼稚園の教育実習、田代先生がいたとか、そんなことを思っていました（笑）。

附属の幼稚園で子どもの主体性をものすごく大切にした幼児教育は、結構あれって珍しいというか、そこまで力を入れて子どもに任せるっていうんですかね。ああいう保育って、なかなか外で会うことが少ないなというのを改めて思いましたし、先生のお話を聞いて、年長さんと1年生に架け橋期って視点を置いているんですが、やっぱり積み重ねなんですよね。それこそ乳児期からの全部の積み重ねが全て、子どもたちの姿そのものであって、保護者の育て方とか、養育態度とか、そういう部分も今に始まったことではなくて、私が心配性なタイプなので、生まれた時から子どもをずっと心配して育てているので、今に始まった

ことでは全然ないんですよね。なので、やっぱり長いスパンで、2年にスポットを当てるのはもちろん効果的ではあるとは思いますが、その前段階があって、その後ろ段階があるんだというところは覚えておかないとというふうに感じました。

○岩立 ありがとうございます。

高木先生、何かご意見、ご質問等がございますか。

○高木 田代先生、興味深いお話をありがとうございました。子どもが「じょうご」を使って遊ぶ事例がありましたが、「じょうご」って、幼児期の子どもたちに与える道具で一番面白い道具だなんて、日頃から思っていて、ちょっと食い入って見てしまいました。

また田代先生のような先生方がいて、遊びの中で様々な気づき・学びがある、ああいう保育が展開されている幼稚園に子どもを入れたいなって、すごく思いました。

今の職に就いて、最近ことさら思うんですが、幼児教育とか、子どもたちが幼稚園でどういうことをどうやって学んでいるかっていうことを、園に入ってから保護者が知ることにはもちろん大切だと思うんですけど、園選びってあるじゃないですか。2歳児後半ぐらいから。その園選びの段階できちんとした幼児教育、遊びの中で学んだよってというようなところを、その時点で保護者が理解していないと（ぶっちゃけトークということでも言わせていただくんですが、）やっぱり跳び箱8段跳べますとか、3年間で絵本を何千冊読みますとか、辞書が引けるようになりますとか、鍵盤ハーモニカがひけますとか…。親は、そういう非認知じゃない部分、目に見える数字で「学び」を判断しがちなので、園選びの段階で、何か保護者にきちんとしたことを発信していけるツールや方法があるといいなって思っています。そこで、よくよく考えると、幼児期にどんな学び方をすると、後伸びする力がつくのかを、一番実感しているのって、実は小学校の教員だと思うんです。

○○幼稚園から来た子は、こういう子だとか、カテゴリーに分けちゃいけないんですけど、やっぱりあそこの保育園から来ると、ここ強いよねとか、たくましいよね、生活力あるよね、言われたことはちゃんとできるけど、それ以上はできないよねなどなど、意外と小学校の教員の口コミっていうのは大きいかなって思っています。私も自分が小学校教員の時に、先輩の先生が、○○幼稚園の子はすごいんだよね（体を動かすことが好きで活発）っていう話を聞いて、その幼稚園に娘を入れた経緯があります。園選び以前の親に、うまく正しい幼児教育を伝えていけるツールを日本で確立できるといいんじゃないかなって思っています。以上です。

○岩立 なるほど。どうですか、田代先生。

○田代 本当に心強いお話だなんて、今思いました。今、こういう遊びを中心とした保育って、やっぱり保育者の力量がないと、なかなかできない。そして、子どもの遊びをどう捉えるか、読み取る力も必要です。次にどんな環境を用意するかも大事だし、それらの見通しをもって保育をして、そしてそれが説明できる先生は、かなり優秀な先生なんです。

「ぶっちゃけトーク」ということで話してよければ、今、公立幼稚園の子どもが減っています。保育時間が長くないとか、建物が建て替えていただけてないので古いとか、通園バスがないとか、そういうことで本当に、とてもすてきな保育実践をしている園に子どもが集まらなくなっているんですね。長い時間預かってくれて、給食が出て、バスが走っていて、そういうところに入園しています。まさに子どものための園選びというよりは、大人のための園選びになっているようなところもあつたりします。先生方の研修会とかに行くと、こんなにいい保育をしているのに、どうして選んでもらえないんだろうって思うことも多くて、そこはなかなか難しい。だから園の中で子どもがどのような学び方をしていくのかに、すごく関心のある保護者もいれば、1日でも1年でも早く自分の手元から手放して、もう誰かに見てほしいとかもあって、難しいなって思ったりしています。

私自身も働きながら娘を育ててきた身なので、自分自身もジレンマも感じながら働いていました。すべての保育施設、幼児教育施設で遊びが充実していく方向を目指していく必要があると思います。

○岩立 ほんとうですね。今、架け橋プログラムもそうですけども、3法令においてもねらいや内容は近似化して、全ての子どもに対して、質の高い保育をと目指している時なので、今日の田代先生のお話を多くの先生方にいろんなところでお伝えいただいたり、ディスカッションしていくことが重要になるのかなと思いつつ聞いていました。

自分の課題が何か分からなかったり、保育の質の違いがわからなかったりすると、自園の保育を省察したり、新たな気づきを得ることがなかなか難しい園もあると思うんですよ。今の田代先生のように、具体的な事例の記録に基づいてお話を聞けば、よく分かるんじゃないでしょうか。私は、一人の親としてもうちの子目線で聞いていたんですが、うちの子を、内面の経験も含めて、こんなにもよく見ているということがわかれば、まずは、保育者のその眼差しが保護者にとって、とてもうれしいに違いないと思いました。次に感じたのは、これだけ見てくれて、眼差しを向けてくれる。そして、理解して次の援助を考え、関わってくれることがわかることは、教師へのすごい信頼になる。私は先生方に事例をお話頂けたらありがたいと申し上げたのは、この保育者や教師が、自分の子や、

多く子どもたちに差し向ける眼差しというものを具体的なお話から、保護者に理解していただきたいと思ったからです。日本の保育では、よく、信頼関係をまずは、築くことが大切と言いますが、それは相談に乗ることとか、子どもを預ってくれることだけでなく、やっぱり温かく、洞察力のある眼差しを向けてくれることが伝わるように、保護者との日常のコミュニケーションで、伝えていくことが欠かせないと思います。保護者との連携、そこから始まっていかなないと、一般的に質が高いと言っても、なかなか保護者には通じないのかなという気はしていたんです。今のようなお話を聞くと保護者としては感動するだろうなと思うんですね。資質・能力の高い保育者は、どんな子にもしっかりと眼差しを向けて見ているから。だからぜひそういった内容を広めていただきたいなと思っております。ありがとうございました。

それでは、最後に高木先生、お願いできますでしょうか。

5. 【テーマ3】 小学校では、架け橋期の学びをどのようにつないでいるか、そして、それをどのように保護者と共有しているか 発表者<高木恵美先生>

○高木 よろしくお願ひします。私のタイトルが全く今回の座談会のタイトルと外れちゃっているかなと思うんですが、最初に申し上げたとおり、今日は私が1年生を受け持った時の、最高に面白い事例を2つご紹介する中で、保護者とどんなふうに関わったかとか、こんなふうにしていけるといいのかをお話しさせていただきます。

まず、この架け橋期が、5歳児、1年生っていう2年間に限定されたところですが、既に前々回の学習指導要領改訂で、小学校の生活科の部分に1年生入学当初のスタートカリキュラムを作成して、幼児教育の成果を生かして、子どもたちの学びをつないでいきましようとして示されています。

その当時、私は指導主事としてかなり推進をして、自分で学校でやってきたことなどを発信してきました。その時に、一番大切なのは、スタートカリキュラムは1年生担任だけじゃなくて、学校全体で取り組むものだという事と、近隣の幼稚園や保育所、子ども園の先生方とも意図を共有することと、何と言っても、保護者と共有すること、つまり保護者とも協働して、子どもたちの学びを支えていけることが、このスタートカリキュラムの趣旨ではないかと考えていました。

ということで、2つ事例をお話しさせていただきます。

スライドを見ていただいで分かると思うんですが、事例が物語仕立てになっているので、すいません、聞いてくださいませ（笑）。

1年生入学してきて、初夏ですね。5月、6月だったかと思うんですが、お察しのとおり、学校に慣れてくると子どもたちは、てんとう虫とかダンゴムシとか、休み時間ごとに外に遊びに行ってお土産を持って、教室に帰ってきます。そんな姿を見計らって、本の読み聞かせが私も子どもたちも大好きで、この『ぼく、だんごむし』の絵本。恐らく幼稚園とか保育所でも、たくさん読む本だと思うんですが、読むことにしました。子どもたちはもちろんダンゴムシが大好きなので、この本に基づいてという部分もあるのですが、とにかく毎日少しずつダンゴムシが増えて、最初は子どもが家から持ってきた小さな虫かごに飼うようになりました。だんだんうようよ増えてきちゃったんで、理科室から大きな水槽を持ってきて、そこに引っ越ししようとなり、いつのまにか、ロッカーの上にダンゴムシ御殿が作られ、本当かなって思うんですけど、数十匹いるダンゴムシに名前が1匹1匹に付いていたりして。

このダンゴムシ御殿を作っていた中心がユウタ君っていう男の子なんですが、その子は保育所から上がってきた子で、いわゆる入学前の引き継ぎでも筆頭に名前が挙がる子で、入学当初から私もほぼ毎日、ユウタ君を連れて、あっちにごめんなさい、今日はこっちにごめんなさい、すいませんでしたっていうことを繰り返していた子でした。なんにでも興味があり、意欲のかたまりなので、思考もばんばん働く子です。その子を中心にすごくいいダンゴムシ御殿が出来上がってきました。

同時にユウタ君を中心に、学級経営がすごく充実してきて、よしよしと思っていた時です。ある日、朝学校に行ったら、子どもたち何人もが職員室に駆け込んできて「先生、大変」って、もう泣いている子もいれば、叫んでいる子がいて「どうしたの？」って聞くと、そのダンゴムシの水槽の中に水がたっぷり入っていて、ほぼほぼダンゴムシが浮き上がって死んでしまっているということだったんです。急いで教室に行ったら、確かにすごい状況になっていて、「誰がやったんだ」「どうしよう」という騒ぎで既に水からダンゴムシたちをすくい上げている子もいました。

子どもたちの話を聞いていたら、前の日、帰る時に、そのユウタ君が水槽に水を入れていた所を目撃していた子がいたんです。それを知って私も、命に関わることだし、しかも学級経営がうまく回り始めていた時だったので、かーってなっちゃって、ユウタ君に「どうしてそういうことするの！！」って、かなり怒鳴った感じで叱りつけてしまったんです。

そしたらユウタ君がロッカーの上に置いてあった先ほどのダンゴムシの本を持ってきて、このページを開いて「ダンゴムシは昆虫じゃなくて、カニとかエビの仲間だから、少しの間だったら水に落ちても平気なんだって書いてあるんだよ」って。「だから、きのう暑かったから水を入れてあげようと思ったんだ」って訴えてきたわけです。改めてそのページを読んだ時に「ああ、そうだ、ほんとだ」って。私もクールダウンしたんですが、ただ、やっぱり子どもたちは本当にパニック状態になっているような状況だったので、ユウタ君が言っていることに対して「少しって、一晩じゃ少しじゃないじゃん」って言う子が出始めて、ユウタ君は「でも少しだよ」っていう感じで、少しってどのくらいか論争になりました。「じゃあ分かった、分かった」「ちょっとみんな落ち着いて話し合おう」って、教室に全員座らせて、話をさせたらですね、こんなふう子どもたちから、いろいろ出てきたわけです。

少しって、根拠なく「3秒ぐらいだよ」って言う子もいれば、「10秒ぐらいだったら、僕もお風呂の中で息止められるよ」とか、「エビとかカニの仲間って言っていたし、エビとカニはもっといつも海の中にいるし」とか、いろいろな自分の生活経験と結び付けたり、照らし合わせたり、頭の中で思考を巡らせて、「少しってこうだ」っていうことを、子どもたちは対話して深めていっていたんです。朝登校してからちょうど1時間目のチャイムが鳴って、2時間目までかかったので、時間にすると1時間半、2時間近く子どもたちはこのことを話し合っていました。結局、彼らが出した結論は、「この本を書いた人が悪い」っていうことになったんです。少しっていい加減な書き方をしているから、ダンゴムシがいっぱい死んじゃったんだって言うわけです。さらに彼らが私に言ったのは、僕たちはちょっとまだ1年生で、なかなか難しいから、先生がこの本を書いた人に手紙を書いてくれって言われて「えー、先生が？」って言ったら「僕たちはまだちゃんと手紙書けないから」って。「じゃあ分かった」ということで、福音館の出版社の編集長に手紙を書いて送りました。

そうしたら、なんと編集長からお返事を頂きました。どんなお返事だったかということ「ぴかいち面白い事例でした」という1行から始まったんですが、文を書いた作者（得田元久さん）の方と挿絵を書いてくださった方（たかはしきよしさん）と3人で協議をしてくださったそうなんです。

その結果、こういうことにしましたということで、「すこし」というこの平仮名3文字は変えません。このままにしますと書いてありました。「えーっ」て思ったら、結局この

「すこし」という3文字があったから、先生のクラスで子どもたちが本当に真剣にいろいろなことを語り合って、命について考えて、言葉について考えて、結果を出してこうしてお手紙までくれてということで、「すこし」という言葉でこんなに素晴らしい経験や学びが生まれたから、3者で協議した結果、「すこし」は変えませんということでした。

そのことをもちろん子どもたちにもお手紙を見せて読んで伝えました。すると、子どもたちが、僕たちもお返事を書きたいということで、「あ、今度は書けるのねえ」と思ったのですが、今度は彼らが出版社の方にお手紙を書きました。幾つか紹介しますね。

この子のはその後、特別支援学級に入った子なのですが、本当にいいですね。お手紙になっているかどうか分からないですけど、ダンゴムシのこと書いて（折り紙でダンゴムシを作って切って貼っている）。この子は、最初はダンゴムシが嫌いだったけど、ダンゴムシの本を見て好きになりましたとか。この子は、トンボが触れるようになりました。全くダンゴムシとは関係ありませんが。この子もカマキリが大好きな女の子なんですけど、カマキリの赤ちゃんを手に乗せたことこちらもダンゴムシとは全く関係ないんですけど。この子は、大きくなったら虫に関係する漫画を書きたくくなりました。次のかがくのともを楽しみにしています。この子は極めつけで、「お手紙くださってありがとうございました。僕たちも勉強頑張りますから平田さん（編集長）たちも頑張ってください」って、編集者にエールを送っている。こんな感じで子どもたちは思い思いにお手紙を書いてくれたんです。結局その後、子どもたちはちょっと虫たちかわいそうだったんですが、てんとう虫だったらどうだろうとか、ちょうちょだったらどうだろうと、いろんな虫を水浸しにして、どのぐらいの時間なら生きているかなとか、そういうことを実験する子がいたり、絵本がすごく好きになった子がいたり、図書室に行っているいろんなことを調べたりということで、このことをきっかけに多様な生活の広がりがありました。何よりも私が感じたのは、子どもたちが言葉をとっても大切に使うようになったということです。特に「すこし」という言葉は、生活の中で意識して使うようになっていました。

つまり、私が思うスタートカリキュラムは、こういうことだと思います。入学してきた子どもたちの不安を取り除くだけの適応指導じゃなく、それまでの経験や「できること」を生かして自己発揮するような。彼らが深い学びをしてくれた中で、私は何にもしてなくて、もし唯一私がやったこととしたら、彼らに「時間をあげたこと」、1時間目始まっちゃったから終わりにしようねと区切らずに、時間をあげたことと、思いを伝えあう場所を用意してあげたことと、あとはユウタ君を中心にした学級経営をやっていたことぐらいで、

本当に申し訳ない言い方なんですけど、「子どもたちに委ねていた」というか、そういう意識でした。でも、これは架け橋期の子どもたちにとって「委ねられる」というのは大切なことなのかなって思っています。

その中で、彼らのこういった面白い事例というか学びには、幼児期に育まれた家庭や園での豊かな経験があってこそ、こういう子どもたちの姿が出てきているんだなとその時に実感しました。

ちょうどその直後に授業参観があって、学級懇談会があったので、この一連の面白い出来事を、保護者の方にもお話ししました。学級懇談会というと、学習面はこうですよとか、生活面はこうですよ、次にこれからこういうことがあるから、持ち物こんなふうにしてくださいなんていう、大体そういう内容で終わっちゃうんですけど、この時は、一切抜きにして、この話だけをしました。実名で事実を全て伝えました。そうするとどういうことが起きたかという、まずユウタ君のお母さんはすごくうれしかったようです。

実はユウタ君、保育園に行っていた時期は、毎日お迎えに行くと、必ず先生に、今日はお友達をたたちゃいました。今日は花瓶を割りました。今日は給食中座っていただけませんでしたなど困った事を伝えられる毎日だったので、お迎えに行くのが本当に怖かった、嫌だったという経験をされていたお母さんでした。ある時はユウタ君を車の助手席に乗せて、そのまま園に突っ込もうかと思っていたなどという話も私は聞いていました。この一連の出来事で、ユウタ君はヒーローだったので、このことを皮切りに周りの保護者のユウタ君を見る眼差しですね、すごく変わって、みんなでユウタ君を育ててくれるようになりました。これは私からすると、私も楽になったというか。先生、きのう、ユウタ君が学校から帰ってから、うちの子とこんなふう遊んでいてこうだったよなど、周りの保護者がユウタ君を育ててくれているような、つまり学級経営を保護者も一緒にしてくれていたような感覚でした。

○岩立 通信環境が悪いのか、高木先生のご発表が、途中で中断されてしまいましたので、ここで、休憩とさせていただきます。

<休憩>

○岩立 じゃあ高木先生、「おおきなかぶ」の事例、続けてお願いできますでしょうか。お願いします。

○高木 すいません。大変失礼いたしました。通信環境が良くなかったようで。じゃあ、ちょっと気を取り直して。2つ目の事例は、1学期の国語の教材「おおきな かぶ」です。音読の宿題を出した翌日に、えりちゃんのお母さまから連絡帳で、次のような相談がありました。おじいさんがかぶのたねをまいた後に「あまいげんきのよいとてつもなくおおきいかぶができました」という文面がありますね。これは、まだかぶを抜いてない時です。えりちゃんはここを読んで、「どうしてまだ抜いてないのに甘いかぶができたって分かるの？」と、お母さんに疑問を投げかけたそうなんです。お母さんはうまく答えることができず、担任の私に「先生、教えてあげてください」という内容でした。ご多分に漏れず、私はこれも子どもたちに丸投げをしまして、えりちゃんが本を読んで、どうして抜いてないのに甘いつて分かるのって言っていて、さらにそれを聞かれたえりちゃんのお母さんも困っているんだけど、みんな助けてあげてくれるかなってことで、国語の時間をお願いをしました。やっぱり子どもたちはいろいろ考えてくれました。

夜中にネズミがこっそりかじっていたんだよとか、ちょっと見えているところをおじいさんがちょっとだけ味見したんだよとか。おじいさんが「あまいかぶになれ」って言っていたから、これは願いが叶ったってことだよとか、またはおじいさんがまいたのが「あまいかぶ」っていうかぶの種だったんじゃないかとか、きっと種の袋に書いてあったんだよって。と言うのも、彼らは4月の下旬に生活科でアサガオを育てるために種をまいているんですね。袋をよく読んで、どんなふうになんていう種のまき方や水やりの仕方などがその種の袋に書いてあって、その経験なんかも生かしながら。さらに、ちょっと大人びた子は、これは本だから、書いた人がこういう物語仕立てにしているわけで、本ってそういうものでしょなんていう子もいたりして、いろいろ子どもたちなりに考えてくれました。

えりちゃんは友達の話聞いて、えりちゃんの中で何か納得したものがあって、一応一段落しました。その日の放課後、私はえりちゃんのお母さんにお電話をして、この件について、子どもたちが考えてくれたことをお伝えしました。お母さんにお電話する時に、私が一つ心がけたことは、まずえりちゃんの口からママに、最初に伝えてほしいという思いがあったので、えりちゃんが帰宅後、ママとお話ししたんだろうなって頃を見計らって連絡を取らせていただいたということです。

この事例も、私は本当に保護者に助けられていて、まずえりちゃんのお母さんが連絡帳を通してですが、相談をしてくれたということです。えりちゃんは3月生まれのいわゆる早生まれって言われる子で、お母さんが非常に学校生活について心配していました。4月

生まれの子に比べたら1年違うので。ただ、早生まれの子も1年生終わる頃には、もう全然全く問題ないと、私の感覚ですけど思っていました。

たしかにえりちゃんは4月当初は、全く字も読めないし書けないし、それは当然なんです。そういう子が1学期の中で文字の拾い読みではなくなり、文字を単語として読めるようになって、文章としてお話が読めるようになって、こういう疑問が湧いてきたっていう、そういう成長ですね。文字が読める楽しさっていうか、実感があったり、そのことがまず嬉しかったんですが。そしてこの宿題なんです。先ほど深津先生のお話にも宿題についての話がありましたが、私は低学年の宿題はいつ誰とどこでやるかっていうことを生活習慣にすることが意味があるものだと思います。宿題って、ご家庭の生活スタイルがあるので、必ず帰ってすぐおうちの人とできない子もいるし、学童に行っている子もいるし。なので、その子その子のスタイルで、例えばお母さんやお父さんが働いてれば、帰ってきてからご飯を食べ終わった後でもいいし、あるいは学童でやったことを一緒に後で必ず確認するでもいいし、場所はここでやるとかっていう生活習慣を身に付ける一つのツールが宿題かなと思っています。なので漢字練習とか、計算プリントとか、そういうドリル的なことだけでなく、例えば上履きを一緒に洗うとか、朝、朝礼で校長先生がお話ししたことを、おうちの人にお話ししようとか、多種多様な宿題を出して、それをおうちの人と共有しながら基本的な生活習慣を身に付ける。これを1年生の時に徹底的にやっていると、高学年になった時に、家庭学習とか自主学習にすっと移行できるんです。それは、よく保護者の方にはお伝えをしていました。すいません、ちょっと宿題の話にそれてしまいました。

ということで、2つの事例から、子どもたちってこういうふうに学ぶんだ。教科書から発展してもそうだし、教科書にはないことを子どもたちは、生活と結び付けていろんなことを学ぶんですよということを保護者の方にもお伝えすることが大切だと思います。こういう豊かな学びが生まれるのは、先ほど生活科の話も出ましたが体験的な活動とか、私がこの子たちと関わった時には「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」というものは出てくる前だったので、今で言えばきっとこういう、10の姿の中から、イメージできることがいっぱいあるんじゃないかって思います。子どもの学びの過程を保護者に伝えるのも、10の姿が手がかりとして使えるかなって実感しています。

さらにこの事例で良かったことがもう一つあります。小学校には週案というのがあって、毎週、一週間の授業の計画案を出して、それについて反省を書いて校長先生に提出するん

ですね。私はこの話を週案の反省に書いたら、当時の校長先生が月に1回発行する学校だよりも載せてくれたんです。この子どもたちの学びを。全校生、地域、いろんなところに拡散じゃないですけど、えりちゃん以外の保護者にも、こうやって子どもたちって学ぶんですねということを校長先生がうまく発信してくださって、管理職の力も大きかったなということですよ。

つらつらと事例ばかりで申し訳なかったんですが、こんな感じで私は担任時代、子どもたちが幼児期に園や家庭で培ってもらった力と、それから保護者との協働で、学級経営がすごく充実し、楽しい教員生活を送れたというお話になります。

すいません、以上です。

○岩立 ありがとうございます。ゆったりとした時間、子どもの力を信じて委ねる、皆で探求する、そしてそれらの実践を広く全校生、保護者や地域と共有する。いろいろ考えさせられましたね。田代先生、いかがですか。

○田代 私はまず、このユウタ君が暑かったから水に入れてあげようと思ったんだっていうことを怒っている先生に言えたってところが、すごい信頼関係だなって思ったんです。この子はとってもダンゴムシが好きだったんだらうって思うし、そのダンゴムシが教室の中でどんどん位置付いていって、ダンゴムシを中心にクラスがどんどん一つになっていって、先生もすごくそこに関わってくれる。そういう大好きなもの、自分の好きなものをみんなで共有できて、それを大事にしてくれる先生だったから、水を入れちゃったことをどうしてだったのが言えて、そこから学びにつながっていったのだと思いました。この先生に言える関係ができていたところが、とっても大事だったような気がしました。

もう一つは、先生のお話を伺っていて、子どもが学んでいく時って、そこで起こっている問題が自分たちのものになっている。自分たちにとって意味のある問いになっている。だから、すごく子どもは考えるし、どんどん考えが出てくるし、教科書の中にある出来事だったり、何か遠いところにある問いじゃなくて、自分たちの中から出てきた、そういう身近な問い、意味のある問いが、子どもを学ばせるんだなと思いました。ここは幼児期の興味や関心を大事にした、遊びを通した学びとすごく重なってくる場所だなって思いました。ありがとうございます。

○岩立 ありがとうございます。

深津先生、いかがですか。

○深津 私も今、田代先生がおっしゃったように、先生とユウタ君の関係性は、すごく

面白いなって感じました。保育園時代から毎日のように怒られていたり、きつとお母さんからも怒られている毎日を送っていると、逃げたり、隠したりとか、そういうスタイルにつながってもいいのですが、あえて先生の前で自分の考えを言えたのは、やはりユウタ君が持っている一つの良さというふうに捉えてみました。

あと、先生のスライドの中で、子どもたちの発言、「少し」とか「甘い」という言葉に対するいろんな子の価値観が吹き出しで出ていたんですが、これを先生が覚えていて、スライドとしてというか、文字でちゃんと書ける、その振り返りの力がすごいなと思いました。

幼児教育でも一つのことについてみんなで話し合ったりとか、価値観について擦り合わせたりする機会はたくさんあるのですが、具体的にこんなセリフがあったんだっていうのが、すごく視覚的によく分かりやすかったし、確かに甘い、何も考えずに「甘い、甘い、甘いかぶ」ってやっていたが、確かにそうだよなって。子どもの意見を聞きながら、自分もそういう言葉の感覚とか、そういういろんな方向からの価値観って、全部大事にするべきなんだなと思いました。

すいません、いっぱいあって申し訳ないんですけど、あと先生のスライドを年長の時の保護者会で見たかったなって、最初に思いました。前回の秋田先生たちの座談会の時に、小学校の先生が保護者が45分座っている絵を想像しているから、授業参観の時に座らせなきゃいけないんだとか、管理職からみんなが座ってないという評価が来るのかみたいなことをおっしゃっていたのをちょっと思い出して、学びのスタイル、着席しているとか、静かにしているとか、こういう部分にどうも意識が行ってしまうのですが、実際に中を紐解いてみると、幼児教育の上ですごくきれいに乗っているし、一つのことについてみんなで考えていて、それを先生がうまくお料理するというか、今回は編集者の人に手紙を書いて、そうしたら逆に面白い回答が返ってきて、もう一回もみ直すみたいな、そういう作業が、すごく子どもの学びを、特に1年生の学びを深めているし、これが1年生の最初の初期の姿だよというのを事前に知ることができれば、なんか1年生の学習って、幼児教育とすごくつながっているんだなっていう部分が、具体的に想像できるのかなってすごく思いました。以上です。

○岩立 なるほど。こういったDVDなどの素材があれば、架け橋期の保育・教育での子どもの姿を、それを大事にした保育・教育のあり方を保護者は実感をともなって理解できて、安心するかもしれませんね。子どもの、田代先生がおっしゃったように子どもの間

いを大事にして、それを意味付けて広げてくださったりしていることがわかると、保護者は本当にうれしいし、よく保護者が「いい先生に当たったね」と話すことがあるのですが、そのように思えるんじゃないかなと思いました。

特に私が強く思ったのは、ああいう対話は疑問も含めて、年長児でも気づいているんですね、直感的に。そして、話したり、聞いたりしているんです。でも、それを「書き言葉」に置き換えていくんですね、小学校は。書くという行為に深め、論理的思考力を深めていくんだなと。書くという行為が、自己の振り返りを通しての自己形成や、思考の論理を学ぶことにつながっていくのだなと思ったことです。幼児期の子どもの姿をしっかりと捉えて、生かしながら、自然に小学校期ならではの考え方につなげていってくださっているんだというのを、先生のご発表から本当によく理解できたなと思いました。

6. 全体の討論、まとめ

それでは、あと15分ぐらいになってしまったのですが、3人の先生方から、私はいろんなことを学んだのですが、先生方からまた、もうちょっとこういったところはお話したいというのはございますでしょうか。ご自由にお話ください。

田代先生、お願いします。

○田代 高木先生に伺いたいのですが、小学校は学習する時間がどの教科が何時間とか、どの単元をどれだけとかが決まっているじゃないですか。幼児教育は1日の流れの中でとか、1週間の中でこういう経験ができたらいいかなってというような、時間の流れが緩やかですね。先ほどの先生のお話のように、子どもから立ち上がってきた身近な意味のある問いを学習の中に位置付けていこうとすると、少し計画が変わったりとか、そこに時間が取られたりもあると思うんですが、そういう面でのご苦労っていうか、子どもの学びを大事にすることと、予定されている学びの道筋との擦り合わせっていうか、その辺りを少し伺いたいなと思いました。

○岩立 高木先生、お願いできますでしょうか。

○高木 例えば、ダンゴムシ事件のことで言えば、授業の2時間目の真ん中ぐらいまでかかっちゃったんです。そのことは、子どもたちも十分分かっていました。1時間目の国語が終わっちゃっているな。次、算数に入っちゃっているな。もちろん私も分かっていて、決着がある程度ついた時に、私は子どもたちに「今2時間目の真ん中になっちゃったね。算数あと20分しか残ってないんだけど、頑張って20分で1時間分やってみる？やっ

くれる？」って言ったら「いいよ」「できるよ」って言ってきて、本当に普段45分でやる授業を20分で彼らはやり遂げたんです。だから子どもたちはちゃんとことの事情は分かっているというか、システムとかは分かっているんです。子どもの生活からでてきた問題を大切にして時間を取ってあげたことで、子どもたちはちゃんとそれに応えてくれていました。

もう一つは、スタートカリキュラムは、時間を弾力的に使っていいですよって、もう国が公言してくれているんです。それまで私はこういうことを、時間割や他の学級や学年を気にしながら、こそこそやってたわけですよ。この時間をちょっと潰して、その授業内容とは関わりがないことをやっちゃったり、ちょっとすごく盛り上がっているから時間長く延ばしてやっちゃったりしていたことを、実は本当に静かにこそこそやっていたことが、学習指導要領でやっていいんだよ。それが1年生の子どもたちのためだからっていうか、発達に合わせた学びだからってことを、ちゃんと印籠で出してくれたのです。「ああ、私の17年間は無駄にならなかったな」って思ったんです。なので、正確に言っちゃうとちゃんと週案があって、この何曜日の何時間目にこの内容をやるっていうのはあるんですけど、そこは教科のカリキュラムの趣旨を踏まえて、弾力的・合科関連的に先生が料理するっていうのは十分可能だし、料理した方が、実はその後も楽になるんですよ。子どもたちは学び方をそこで覚えていくので、例えば教科に分かれた時に、彼らが算数の時間に繰り上がりのある足し算の方法を話し合わせた時に、先ほどと同じようなレベルで、こういう方法がある、こんな方法もある、それじゃ駄目だよっていう、学び方をちゃんと引き継いで教科に落としてくれるんです。

○岩立 田代先生、よろしいでしょうか。

○田代 なんか本当にうちの娘も高木先生が担任だったら良かったなって。

○岩立 同感です（笑）。義務教育でも、特例で教科の時間を柔軟に使えるのですよね。義務教育ですから、算数何時間、国語何時間以上と決められていると思いますが、例えば今のような一連の物語として合科的にまとめていく時などには、算数から何時間、国語から何時間などを、合科的に進める学習に持ってくるのが以前から出来ました。合科的な学習目標の中に、算数や国語の目標を含めることができますので。以前、ある中学校で、新たな総合的な学習を進める教科「世のなか科」などが作られたことがあったと思います。今は、合科の意味が重視され、というか、そうでないと解決できないような複合的な社会問題などを解決していくようなアプローチが重視されていると思います。今は、STE A

M教育などが高校などで行われています。これは、サイエンス、テクノロジー、エンジニアリング、アート、マスマティックスの頭文字を取ってSTEAM教育と言います。例えば、インドネシアの交通渋滞の問題解決をするという時に、信号の技術的な問題も、ルールを守るといった人間の心理的な問題など、いろいろなことが複合的に関わってくるような問題が世の中には多く、1教科だけの知識ではとても対応、解決できないわけです。理系も文系もなく、様々な科目や領域の総合で問題解決をしていく。未来志向の問題解決とはこういうことなのかもしれません。その最初のところが総合的な学習の時間でもあるし、生活科でもあるし、原点を探れば幼児教育であるようなところだと思うんですけども、そういう教育の先端を昔から実践してこられた先生が、高木先生だったのかもしれないね。

深津先生、いかがですか。

○深津 私、田代先生に質問があって、知っているのが保育所メインなもので、幼稚園の専業主婦家庭の保護者の方たちに、幼稚園が就学前にしている保護者支援。保護者主役のほうの保護者支援は、私みたいな不安症の保護者とか、例えば学習面の相談を受けたりとか、そういう機会があるのかとか、どんな情報提供をしているのかとか、そういう具体的な部分をもしご存じでしたら教えていただきたいと思います。

○田代 ご質問ありがとうございます。私が自分が園にいた時の話になりますが、私がいた園では、火曜日を保護者の日としていました。なので、改めて保育参観日とかがあるわけではなくて、火曜日はいつでも朝から帰りまでどこを見ていただいてもいいという形で、いつでも保護者に見ていただくという場を開いていたんですね。火曜日の午後は保護者と面談する日となっていましたので、見たところを基に、午後お話をするとか、個別面談を組むとか、そういうことをしていました。

本当は毎日でもいいんですが、国立の附属幼稚園という性格もあって、大学との研究や他の日にはいろいろなところから来園者や見学者がおりましたので、そういう人たちには火曜日はお断りをしていて、そういう日を作っていました。子どもの様子を一緒に見たところ、さっきのスライドのような形で、午後を通してお話をしたりということをしていました。

もう一つは保護者の方に園にいろいろなボランティア活動をお願いしたりとかして、例えばちょっとスライドに写真を用意してあるんですけど、見せても大丈夫ですか。

○岩立 お願いします。

○田代 すいません、じゃあちょっと共有させていただきます。

これは、日本画が得意なお母さんがいて、そのお母さんが園内のイラスト描いてくれたんですね。絵が得意だから「ちょっとこんなのを作りたいんだけど描ける？」なんて言って描いてもらって、それで幼稚園マップを作ったこともあります。

保護者の方に保育に入っていただいて、お父さん先生とかお母さん先生っていう形で、保護者の保育参加もしていました。教員がクラスで1人ではできないような、例えば木工活動したいなと思っても、ちょっと初めての道具で危ないので、大人がいっぱいいる時のほうがやりやすかったりして、コリントゲーム作りをしました。また、保育の中で竹を切ってきて、竹馬を作ったりとか、園の中の花壇の柵が必要で、それを親子で一緒に作ったりとか、あとはこういうボランティアでカボチャを掘ってもらうのをお母さんたちにお願いで、私もそこに一緒に関わってやったりですとか、園でできる柿が、もうとても渋柿なので、それで干し柿を作ったりとか、そういうことをいろいろしながら、保護者にも教育活動に入っていただく。そして入っていただくことで、園の教育が豊かになる。保護者と個別の対応も大事にするというような、そういうことを幼稚園でやっていました。

○深津 ありがとうございます。

○田代 もちろん、お仕事があって来られない方は来られない。来られる日に来るという感じだったと思うんですけどね。

○深津 横のつながりが濃いですよね、やっぱり。

○田代 そうですね。なので卒園していった保護者って、いろんな地域の小学校に進学していくんですが、みんなそれぞれの学校でPTAの役員とか会長とか、皆さんそういうところを担っていて、学校と連携して教育活動するというのが、定着するのかな。そういう保護者が多かったですね。

○深津 今、この座談会をしている間に、保育園が来年度PTA廃止しますっていうメールが来て、小学校も来年から廃止なんです。もしかしたら田代先生の地域と二極化しているのか分らないですが、そういう保護者が教育とか保育に参加する場とか、先生と一緒にというのが負担がある地域なのかもなど、私が住んでいるところがあって思いまして、そうすると、横のつながりが減ってしまうので、何か聞きたい、特に就学について情報を得ることがちょっと難しくなってくると、先生方の力がさらに必要なのかなって思いました。

○田代 学校の先生1人が持っている力量ってあるじゃないですか。その先生が得意な

こととか、苦手なこととか。先生同士も協働しますが、そこに地域の人たちがたくさんいることで、本当にそういう力を一緒に合わせていくことで、先生だけではできないこともできたりとかっていうことがあって、なので、「できる人ができる時にできることを」が、モットーでした。みんなが同じように参加しなくてはいけないわけではなくって、ここはできる人いませんかとか、土曜日に例えば田んぼの修理をするから、お父さんたちで来られる人いたら、お力貸してくださいとか、そういう感じでやっていたんですけどね。難しいですね。

○深津 難しいですよ。

○岩立 ありがとうございます。高木先生、最後に何か一言ございますか。深津先生とか田代先生に対するご質問でも何でもいいんですけど、もう時間が押してきてしまっているんですが。

○高木 今、田代先生がおっしゃっていた、先生の園から巣立っていった保護者が、いろんなところでPTAの役員になっているという話で、私も先ほど先生方からすごくお褒めの言葉頂いてありがたいんですが、それは全く逆で、私が保護者に恵まれたんだと思います。それこそ、幼児期に幼児教育施設で、保護者の親としての質とかそういったことを育てていただいていたので、役員になるようなお母さんが中心になって、まとめてくれていたということがあって、保護者に恵まれていたっていうのが一つです。

あとは、そもそも私が1年生でああいうことができたのは、幼児教育の子どもの見方の感覚がたぶん私の中にはあったからだと思います。去年1年間校長として在職中も、その感覚ですごく役に立ちました。例えば入学してきた1年生に、なかなか教室に入れない子や、あるいは高学年になって突然学校に来られなくなった子とか、そういった子を見つめる時に、幼児教育の視点で見つめていくと、その対応の仕方とか、見通しの持ち方にすごく役立ちました。高学年の子が突然学校に来られなくなった時に、担任も周りの先生も、それはそれは困って、組織的にいろんなことをしたんだけど、ふと考えて、担任の先生に「〇〇先生、幼稚園から送られてきた要録見てみようかって」。で、その子の指導要録をちょっと見てみたんですね。要は4年前ですけども。そうしたらそこに、「新しい環境とか、初めてのことに慣れるのにとっても時間がかかる子で、こんなふうにするとうどん馴染んでいった」というような課題や手立てが書かれていました。これを読んだ時に、おそらくこの子は1年生から4年生まですごく頑張って我慢してきたんだろうな、それが今5年生って高学年の壁にぶち当たって、出てきちゃったから、「初めてのこと」が4年間

続いていてすごく大変だったんだね、きっと」と担任と話して、無理にそこを刺激しないで、お母さんにも「大丈夫、学校になんて来なくてもちゃんと生きているし」という話をしたら、お母さんが「学校に来なくていいって言ってくれる校長先生っていないですよ」って驚かれました。でも、これは、幼児教育の子どもの内面を理解するということ、さらに、要録に助けられたわけです。そういったことから、やっぱり幼児期の子どもたちの育ちや学び、そういったところを保護者に伝えていくというのは、架け橋期にも大切だと改めて実感しています。

最後にちなみに、先ほどのユウタ君ですが、3年前にぼったり本屋でお母さんと会って、「先生」って声かけてきてくれて、「今年大学受験失敗しちゃったんだけど、有名私立大学を受けます」ということで、恐らく受かったと思います。どんどんどん力を蓄えて、本当に世界に出しても恥ずかしくない子になっていると思います。以上です。

○岩立 後伸びする力ですね。いい事例をありがとうございました。

先生方のお話を聞きますと、やはり保護者と園・学校との連携は、非常に意味があり、保育・教育の質の向上には欠かせないものであることがわかりますね。でも、じゃあこれから共働きなどが増えていった場合に、どうやって連携を推進していくのか。「連携」って一言で言うが、つくっていくのかは非常に難しい。私がアメリカの小学校で経験した時には、年度当初に年間のこことここにこういうことをやるから、何回か出てくださいと言われました。年度はじめに年間の計画を伝えてくれれば、予定を入れて参加することが可能なんです。年休って取れますし。だから私もPTA会長を経験しているんですが、こことここは休めるなっていう時に仕事をしました。また、私が会長をする代わりに、交代して、できる時にできることをするために副会長を4人立ててくださいなどと要望しました。やりようによっては、保護者の力を資源として学校・園の教育の質を高めていける、保護者の力を糧にできるのがあるのかなと思うんです。そうでないもったいないっていうか、保護者は力もありますし、保護者ならではの視点をお持ちだし、共に新たな教育を創っていくことが、田代先生のおっしゃったように全ての関係者が関わり合って、よりよく育ち合うということにつながるのではないかと思います。やっぱり教育は園や学校にお任せっていうのは、どうなのでしょう。私も働く親としては、その気持ちはわかりますが、連携することの意義やそのやり方、スケジュールなどが、あらかじめわかれば、私は関わりたいと思うのですが。こんなに面白くて奥が深い架け橋期の教育なので、それらを具体的に理解し、新たな連携の方法を見出していけば、保護者も早くに予定に入れて、参加できる

し、参加したくなるのではないかなどとお話を伺いながら思いました。

さて、もう終了の時間になってしまいました。3人の先生方それぞれから、架け橋期の子どもの姿や保育・教育実践を具体的に理解できる情報提供をしていただきました。保護者にとって架け橋期の不安って大きいですよ。深津先生のお話を伺って、子どもの不安だけじゃなくて、保護者の不安をまずは解消するような情報提供や支援はとても重要だと思いました。一方で、子どもは、だんだん深い学びに入っていくということでは、子どもの学校での様子とか、先生がどのように一人一人の子どもに眼差しを向けて、理解し、指導・援助しているかという情報を、ぜひ具体的にお伝えいただきたいと思いました。それが、保護者にとってうれしい情報になるし、保育者・教師への信頼に結びつくと思いました。また、架け橋期に、子どもの力を活かしながら、いかに深い論理的な学びにつなげてくださっているかということも、保護者にお伝えいただきたいと思います。先生への信頼は、一人一人の子どもの理解と適切な指導、そして、それを保護者とのコミュニケーションによって、共有していくことによって築かれるのです。この座談会を通して、架け橋期の保護者の連携について、何か具体的な方向性が見えてきたような、マップが描けたような気がしました。先生方、今日は、本当にありがとうございました。

それでは、事務局の新免専務理事にお返しします。

○新免 本日はお忙しい中、第10回教育座談会にご出席を賜り、誠にありがとうございました。

日本教材文化研究財団では、公益事業の指針づくりに役立てるために、有識者の先生方をお招きして、日本の教育が直面している旬のテーマで座談会を開催させていただいております。

本日も、コーディネーターの岩立教授をはじめ、パネラーの高木センター長、田代教授、深津准教授と素晴らしい先生方から、大変貴重なご意見やご提言をいただき、公益財団の理事・評議員を代表して、心から御礼を申し上げます。

先月の13日の中教審で示された第4期教育振興基本計画の中に日本社会に根差したウェルビーイングの向上がありますが、学校が楽しいと思えないとウェルビーイングも実現しないと考えています。私には、来年から中1と小1に上がる孫がおります。高1クライシス、中1ギャップ、小1プロブレムとありますが、小1プロブレムの架け橋期が、最も重要であると考えています。

同じく、先月の30日の架け橋特別委員会では、6つの課題と方向性が示され、架け

橋期がなぜ大事なのかを家庭に普及啓発する大切さが議論されました。

今日の座談会での気付きや見方・考え方は、大変大きなヒントになるように思いました。今後の当公益財団の調査研究事業やセミナー・育成事業の指針とさせていただきたく存じます。

簡単ではございますが、本日の座談会のお礼の挨拶にかえさせていただきます。
誠に有り難うございました。